内水試だより
90

茨内水試図

霞ヶ浦のエビは多いか少ないか

現在、霞ヶ浦ではエビが近年になく少なくなっています。特に湖心附近で少なく、土浦入、高浜入ではやや多くなるものの全体的にみると十月上旬現在で昨年の十分の一、一昨年の五分の一程度となっています。その原因は、ゴロの資源量が非常に多くなったためと考へられます。

九月以降のエビ ゴロの豊凶は生まれてくる仔魚や幼生の数とその生き残りによってきまります。今年、発生したエビの幼生の数は、近年になく多く、昨年、一昨年の倍近い値を示しています（図1）。にもかかわらず、幼生が生長して底生に移行する段階では、昨年、一昨年よりも少なくなっています。

一方、ゴロの当歳魚は、図2に示したように六月から出現しますが、ことしは、その数が非常に多くなっており、十月で比較すると、昨年、一昨年の四ー五倍にたっしています。その原因として考えられるのは、今年の環境条件、とくにワカサギが少なく、食べられる量が少なかったためと考えられます。

ゴロが多くなると、エビの幼生はゴロの餌となって食べられる機会が増え、その資源量は減少へむかいます。実際に、九月にゴロの胃袋をとりだして調べて見ると、底のほうにいるゴロは、主に動物プランクトンやイサザアミを食べていますが、中層に浮上しているゴロはこの他にエビの幼生も食べており、その数は浮上したゴロの数に匹敵するほどです。また、このように浮上しているゴロの数も今年は特に多かったようですが、これもゴロの数が多くなり過ぎたための現象と考へられます。ゴロは六月から発生しはじめますが、エビ幼生の出現が盛んになる八ー九月には成長してエビの幼生を捕食するに十分な大きさになります。そうであれば、六ー七月生まれのゴロは、初期に間引きして、おさえエビの生き残りを多くすることが効果的と考えられ、資源管理上の重要な検討課題といえそうです。

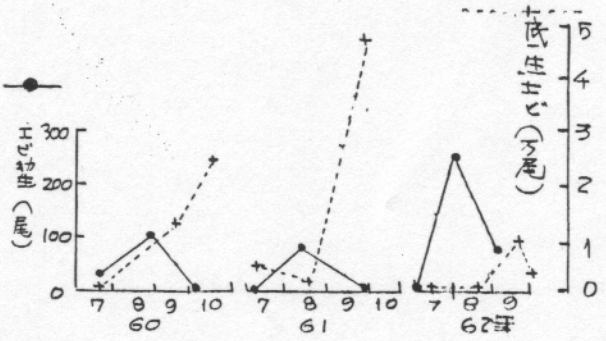

図1 エビの幼生（浮遊生活）と底生生活に入った稚エビの出現状況

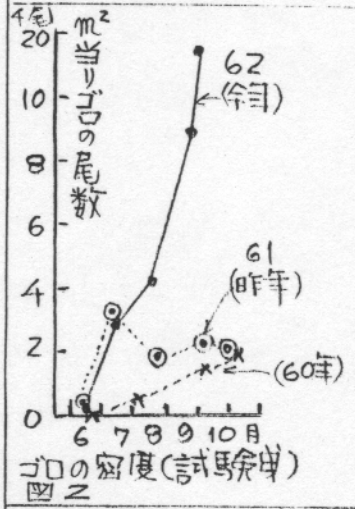

図2 ゴロの密度（試験網）

次にこれからの漁獲量の予想ですが、どうもあまり多くは期待できそうにありません。エビとゴロの総漁獲量（試験曳）は、毎年十月に最高の4kgに達します。今年の十月1日の調査でも4kgが採集されました。この4kgのうちわけはゴロ8に対しエビ2ですから、エビの成長の若干の遅れを考慮しても、今年秋期のエビは不漁と言わざるをえません。

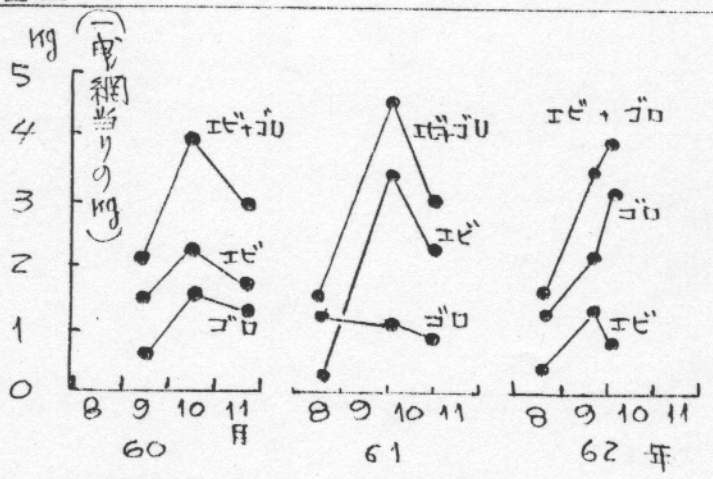

図3 試験網による1曳網当り漁獲量

茨城県内水面水産試験場
茨城県行方郡玉造町甲1560（62・10・12）

茨内水試図